

荒井保男著 『生きる糧となる医の名言』
(中央公論新社、2006年)

平野 葉一

「医」の歴史は人間の歴史である。「歴史」が人間営為の記録である以上、確かに「〇〇の歴史」という際にはそれは常に人間の歴史を意味する。しかし、ここでいうのはそのような意味ではない。「医」の歴史の根底にあるのは、まさに人間の生への欲求である。それが、精神的であれ物質的であれ、また、思想的であれ技術的であれ、複雑に絡まり合って築いてきたものが医術であり、医学なのである。それゆえに、「医」は最も根源的な人間営為の現れであるといえよう。

人間の生活、文化を表す際によく「衣食住」が用いられる。これは、衣（着る）、食（食べる）、住（住む）という人間にとって必要最小限の生活様式を表す。しかし、これらはまた人間の「生」に対するもっとも基本的な欲求を表しているとも考えることができる。自然の中に裸で放り出された人間は、暑さや寒さ、風雨などから身を守るために何かをまとわなければならない。また、食することは身体を保持する上で不可欠である。そして、さまざまなものと共存する自然においては睡眠や休息のための住居もまた人間の生を確保する重要な要件である。古代ギリシアの医聖ヒポクラテス（紀元前5世紀頃）は『空気・水・場所について』という著作のなかで、「病気はそれぞれ自然の本性によって生ずる」とし、人間の病気が気候や風土と深く関わりをもつこと、住まう自然環境や飲み水などによって人間の健康や性格までもが左右されることを述べている。現代では科学技術が進歩し、人間の各部位を局所的に看たり遺伝子や病原菌をミクロに観たりする医療が展開されているが、それでも医療の基本に人間の生があることに変わりはない。そして、人間は与えられた環境、条件の中で生活してきたのである。それゆえに、「衣食住」はそのまま「医」の歴史に関わることになる。そこには、「医」が人間営為そのものを表すことが見てとれよう。

荒井保男氏の『生きる糧となる医の名言』は、まさにこうした精神をもとに著された書である。そこには、医療行為の歴史から生じた言葉ではなく、人間の生に正面から対峙した人々の言葉が解説とともに綴られている。医学博士であると同時に文学博士でもある荒井氏は、医師として医療に携わる傍ら放送大学客員教授を務めるとともに、平成16年度日本医史学会総会会長を務めるなど、医学ばかりではなく医学史、科学史にも造詣が深い。また、日本エッセイストクラブ会員でもあり、医学の専門知識を越えた幅広い見識から積極的な文筆活動も行っている。

本書『生きる糧となる医の名言』は、荒井氏の同種の著作として三冊目のもので、氏はこれまで『医の名言』（1995年）、『続医の名言』（1998年、ともに中央公論社発行）を著している。本書の後書きによれば、これらの著作は、氏が『新薬と治療』（山之内製薬株式会社、現・アステラス製薬株式会社発行）誌上に連載していた「医のことば」にそれぞれ新たに書

き下ろした何編かを加えて出版したものである。それぞれ医学や医療を推し進めてきた歴史上の人物、医学に関わる書物の言葉を取りあげ、その人物の生涯や医学的業績、書物の歴史的意義を背景にその言葉を解説する形でまとめられている。

本書の内容にふれる前に、前刊の二冊について簡単に紹介しておく。『医の名言』では、ヒポクラテス、アリストテレス、イブン・スィナーなども含めて西洋における医学の歴史に関わるもの23編、『史記』など中国の医学に関わるもの2編、『古事記』にはじまり杉田玄白など日本の医学に関わるもの27編がまとめられている。そのなかには、人体解剖で知られるルネサンスの天才レオナルド・ダ・ヴィンチや、看護医療に関わるナイチンゲールの言葉も含まれている。また、『続医の名言』には、西洋の医学に関するもの10編、中国の医学3編、日本の医学22編が収められている。

さて、本書『生きる糧となる医の名言』の紹介に入ろう。本書には37編の「医の言葉」が収められている。それは前二書と同様、西洋医学に関わるものだけでなく、中国や日本医学に関わるものを含んでいる。その項目は以下の通りである。

神仙伝「董奉（伝）」、徐福（徐市）、『説苑』、イエス・キリスト、ディオスコリデス、葛洪、仏足跡歌碑、延喜式祝詞、良忠上人、道元禅師、ベルナルディノ・ラマッツィーニ、ニエル・デフォー、白隠、吉益東洞、三浦梅園、永富独嘯庵、フィリップ・ピネリ、亜欧堂田善、桂川甫周、ネッケル病院ラエンネック記念碑、宇田川榕庵Ⅰ・Ⅱ、浅田宗伯、松本良順、高松凌雲、田中正造、ウィリアム・オスラー、高木兼寛、北里柴三郎、後藤新平、呉秀三、孫文、国木田独步、魯迅、ヴィクトル・E・フランクル、永井隆、森鷗外

ここでは、これらの中から筆者の感じるままに、荒井氏の主張をよく表していると思われる4編を選んでその内容を紹介しておく。

まず冒頭の1編では、古代中国の葛洪（かっこう）の『神仙伝』からの言葉として

「君異、山間に居る。人の為に病を治し、銭物を取らず。人の重き病癒ゆる者をして、杏五株を、軽き者をして、一株を栽えしむ。此くのごとくして数年、計へて十萬餘株を得たり。鬱然として林を成す。」

が挙げられている。ここでは、中国の董奉（とうほう）という仙人の故事に由来する「杏林」という言葉が解説されている。董奉は貧しい民の病の治療に専念し、報酬の代わりに杏の木を植えさせたが、しまいには十万余の杏の木が立ち並ぶほどにもなった。ここから「杏林」が医者之美称となったというのである。荒井氏は、董奉の故事をパターンリズム時代の理想像としてとらえる。尊父主義としての医師の姿は、父親が子供に対すごとく医師が患者に思いやりをもって医術を施すことに現れる。しかし、氏は今日の医学が一時的なパターンリズムではなくいわゆる「インフォームド・コンセント」へと移り変わっていることにもふれ、さらに「インフォームド」が医師の支配的行為となつてはならないことへの訓戒も含めている。

同じ中国の書からの言葉として、前漢の劉向（りゅうきょう）による『説苑』より

「良薬は口に苦し」

が挙げられている。荒井氏は、この言葉が本来は「良薬は口に苦うして利あり、忠言は耳に

逆うて利あり」と対句になっていることから、これが前句のみよく知られることになったのは、それだけ「薬と人間との関係は切っても切れないほど深いものである」からであろうと推論する。さらに、「良薬」がときとして「毒薬」となっていることから、古代中国人にとつての「くすり」が治療効果と毒物作用の意味を兼ね備えていたことを紹介している。さらに、現代におけるさまざまな薬禍が、薬物をもつ「両刃の剣」としての性質に由来することから、古代中国医学の姿勢に学ぶべき点があることに注意を促している。こうした人間と薬の関係については他の項目でも扱われているが（たとえば古代ローマのディオスコリデスの項の本草、薬草の話）、氏は医学の著しい進歩が現代に大きな貢献を果たしていることを前提としながらも、古人とくに中国や日本の医学・医術の歴史的思想が人間の生き方におも大きな教訓を与えるものであることを説いていると感じられる。

紙面に限りがあるので、西洋医学に関する項目を二つ紹介しておく。

一つは聴診器および聴診法の発見者ラエンネックに関する項で、

「この病院でラエンネックは聴診法を発見した」

というパリのネッケル病院にある記念碑の碑文が挙げられている。ここで荒井氏は、内科における聴診器と聴診法発見の歴史について紹介し、それが現代医学における大きな変革を意味していることを説く。今日では内科医も外科医もともに「医者」であるが、かつては「医者」とは内科医を指し、外科医はある意味で技術職と見なされていた。内科医は経験的に患者を診るが、人間の身体の内側を見ることはできない。そのために見出されたのが聴診法であるが、それは聴診器によって身体を「解剖」し疾病を看ることを可能にしたという点で、現代医学に一つの道を開いたばかりではなく医療の意味をも転換させたと考えられる。氏の議論はそうした医学史の一断面を明らかにする。

もう一つはヴィクトル・E・フランクルの言葉

「人間とは、ガス室を発明した存在だ。しかし同時に、

ガス室に入っても毅然として折りのことばを口にする存在でもあるのだ。」

である。フランクルは「実存分析」を提唱した心理学者であるが、とくにユダヤ人として強制収容所に送られた経験をもつ。荒井氏は、こうした過酷な体験こそがフランクルをして人間が「意味への意志」によってもっとも深く支配される存在であるという結論へと向かわせたと論じる。氏が本書でフランクルを扱っているのは別な意味でも興味深い。それは、本書の最初の例で述べたインフォームド・コンセントの重要性が叫ばれるきっかけがナチスによる強制的治療—人体実験—にあるからである。その意味では、社会の変化によって本来専門家の領域である医学知識が日常化する今日、医療を授ける者、受ける者の両方が考えるべき問題が提起されているような気がしてならない。

本稿の最後に、荒井氏の「あとがき」のことばを紹介しておこう。

「優れた先人の「医の名言」はよき医師への指標となり、よき人生へ導く多くの示唆を与えてくれる筈である。いや医師ばかりではない。医は全人のものであり、「医の名言」は万人に通ずる。」

この言葉にこそ、本書を著した荒井氏の人間と医療に対する強い思いを感じてやまない。